

〈近世女性史資料(8)〉

佩戒 女 小 学 (1)  
— 書誌・翻刻 —

黄 色 瑞 華\*<sup>1</sup>  
若 林 俊 英\*<sup>2</sup>

- 
- \* 1 城西大学教授・主任研究員
  - \* 2 城西大学女子短期大学部助教授



一書誌

所蔵 城西大学国際文化教育センター。

書型 大本上、下二冊。縦二六・四センチ。横一八・六センチ。

チ。

表紙 厚紙の上に紺色無地の極薄紙を貼る。

題簽 中央。白紙四周枠。縦一八・三センチ。横三・七センチ。

チ。

佩戒  
絵入 女小学 上(下)。

綴糸 白木綿糸一本掛。

内題

佩戒をものゝ  
いましめ 女小学をんなしやうがく (文海堂梓行)

目次 挿絵二面(一ウ・二オ)を挿み三面(二ウ・三オ・三

ウ)。

序 二丁(四オ〜五ウ)、無署名。

跋 三面。民斎主人書。

丁数 上一七丁(挿絵六面)。下一八丁(挿絵八面)。

各面 本文・序・跋とも九行。

匡郭 本文・序・跋とも縦一九・五センチ、横一四・一センチ。

チ。

柱刻 佩戒 一〜十七(上)、十八〜三十五(下)。

奥付

享保十乙巳 暮春吉祥日

江戸日本橋

小河彦九郎

書肆 大坂心齋橋筋順菱町

敦賀屋九兵衛板

## 二 翻 刻

### 凡 例

- 1 本稿は『佩戒女小学』(内題、戒女小学)の忠実な翻刻を旨とする。
- 2 使用漢字は原則として現行字体とする。
- 3 漢字ルビ、読点はすべて原本のままとする。
- 4 丁移り、表離の別は「1オ・1ウ」を以って示す。
- 5 挿絵は縮小とし、紙面の構成を考慮して、適宜挿入する。



2オ



1ウ

女小學訓品くゝの事 (目次)

- 孝行かうこうの道みちをしへの事
- よめいりの事
- 舅しゅう 姑しゅうとめにつかふる訓くん
- 夫むつとを天てんにたとへたる訓
- 人ひととしたしむ心こころ持もちの訓
- 忍にんの字じの訓
- 恩おんある人にむくひんをしへの事
- 我わが身心しんをせめてつとむる訓
- はらたつる事こといましむる訓
- 心こころつよからぬ訓
- 異見いけんを聞きわくる訓
- 人ひとをつかふをしへの事
- 天てんの道みちといへる訓
- ひとりをつゝしむ訓
- 心のうつるをいましめの訓
- 人に欲よくあるをいましめの訓
- つゝしみおそるべしとの訓
- 女おんなに四よつの行おこなひある訓
- 古ふるき書しよをよみならふべき事
- 手習てなひぬひはりの道みちの事

○人に常つねありといふ訓

○誠まことなき人といはるゝをいましめの訓

○真綿まわたに針はりをつゝむといへる訓

○人のあしきを見て心こころ戒いましめの訓

○人の許もとへ行ゆきて程ほどよく遊あそぶの訓

○こゝろねたみいましめの訓

○和哥わかに二つの心あるを聞きわくる訓

○人ひとこといふをいましめの訓

○心こころのかゝみといへる事

序

抑おさ此こ佩おものの戒いましめは過すぎし比くらみやこのうち宇保氏ほうち何某なにがしとかや。其女そのむすめを人のかりやるとて。はなむけに書かてあたへぬる教訓まじやうんの文也。まことに其こと葉はやすらかにして。市女商人いちめあきひとの耳みみにも通つうじやくしかも聖せいのかしこき教をしへのあと成なりへし。これをしか名付なづけることとはすへてふの婦ふたる道みちをまめやかに教をしへて。つねにわすれず帯おびのごとくをば。終ついに父母ふぼの名なを頭あたらハし妹背山いもせいもせの中なかのみさほは。松竹しょうちくとともにかハラズ。鴟もずの草くさき色いろあざやかにそのさかえはた鶴つる龜かめとおなしくよハひながゝらん事をことぶき。つくゝ書かてあたへけん。親おやの心こころや誠まことに慈じにとゞまるとかやのせちなるものならんかし。しかのミならず。わが日の本ひの本は。婚えんをむすぶに帯おびをもてすなることも。常陸ひたち帯おびの神かみわざよりして。

井手の下帯一度むすびぬれば。こと人に二度とかじとの心はへ  
にもかよへる哉。それ人の親の子をおもふなる。あるハ心はや  
ミにあらねどもとよみ。あるはぬれたるかたにわれハねてと詠  
ず。焼野、雉子夜の鶴ともにかハる処なしとぞ見ゆる。其中に  
も思なるハ唯にとめんことをのミほかして。父祖をあらハすの  
名をおもくする事をはからず。みだりに婚をさだめて名□つ。  
あだなる名をながしぬるも。たぐひおほきぞかし。こゝに宇保  
氏や此国もろこしの貞に節に名ある人のうへを遠くあふき。ち  
かくしたひて。せちに其女にをしへ示しけん。白圭に雪を  
そぐより猶きよくうるハしきものにあらずや。しかればかう  
やうの文のむもれ水人しらす成なん事をあたらしミ。此度梓  
にちりばめ正木のかづらながくつたへんとほりするもの有。予  
にこれか序かゝんことをせむ。いなミのゝいなみがたくて。あ  
るはなきにはおとること葉をもかへり見ず。ミじかき筆を不老  
泉のほとりにとる。

富る人は宝をもて錢とし。よき人はこと葉をもてはなむけに  
すとなん。われハよき人にもあらずまた富るにもあらず。何  
をかはむけにせん。しかりとてやミぬるも本意ならねば。老  
らくのねぎめがちなるおりから。つくく思ひ出ることをそ  
こはかとなく書つゞり。一卷の文をあたふるならし。我をこ

ひしとおもハズ。よりく此文を見て夙にをもひ夜半にいま  
しめよ。能此文のごとくつとむると聞侍らはわかよるこびか  
ぎりしらすこそ

○以てや孝行をつとむるに品くあり。父母の側に居て。あ  
さな夕ないつくしミうやまひよく養ひ侍ること。大やう子たる  
もの道也。汝は故郷へ行なれば。此つとめはかけぬるぞかし。  
今よりのちの孝行には何をかせん。我筆のあとを守りたがふこ  
となくは。よつもまた心さしをやしなふの孝子なるべし

○嫁いりするを帰るといふと古き文に見えたり。いかにしてか  
くいふとなれば。かならず夫の家にゆく。されば女は親の内に  
のミ住はつべきものにあらず。夫の家こそ天よりそなハれるわ  
が家なれば。よめいりはわが家に帰りたることハリなり。さる  
によりて国をへだて、行こと。昔よりかならずあるならひなり。  
はるくの海山をしのぎて行こうたてしとおもふべからず。  
君見ずや。高きもいやしきも。たれかをやのうちののみありて。  
人にゆかさるものありし。よつもまたおもへや

○今まで親のうちに居侍るはこれかりのやどりなり。妻として  
夫のためにいのちをすつること人の常也。それは何ゆへなれば。  
夫はわが家のきみなれば。わが身よりおもきをすればなり。是  
をしりてわが親より夫の親を厚くしたしミむつぶことハリな  
り。舅。姑は天より我にそなハれる家のをやなれば。疎かにし  
侍らんや。いたりていつくしミうやまふべし。のたまふことを

ばなにはのよしあしをいはず。おほせかうふりぬる事しばらくもおこたるべからず。そのはらにしもやどらねど。みな母木のことハリ身にしめておもふべし

○夫は天にたとへ。母は地にたとふ。さればをつとのたふとき事。天のたかきがごとし。妻たるものゝこゝろえあり。夫婦とおもふ故になるゝにしたがひて。うやまひにをこたり。心ざしにもたかふぞかし。初よりおハリまで主君とおもひ。つゝしみつかふまつらば。あやまちすくなからん。此をしへをよく守りなば。常にかたはらに居て。枕をあふき。ふすまをあたゝめんより勝れる孝行なるべし

○人はわれによからず。我は人をうやまふに。ひと我に無礼ならん。此とき我よりのしたしミもうやまひもやめ侍るもの也。世のひとミなしかり。たとひ人はともあれかくもあれ。われよりしたしミうやまふべき人ならば。我よりするの道をわするべからず。人が人ならば我もまた人のごとくせんとて。我よりすべきしたしミうやまひを捨るハ。むかふのあしきをまなびならふなり。人のわれによからぬハ。我したしミうやまひのたらぬゆへなりと。ミづからかへり見てをのれを責べし。これ孟子の御をしへ也。かくする事久しければ人も岩木ならず。かならずよくなるものなり

○我よきに。人のわるきがあらバこそ。人のわるきハ我わるきなり



10ウ



10オ

○あだにのミ。人をつらしと何か思ふ。心よ我をうきものとし  
れ

これみなひじりの御をしへにかなふうたなり。つくくよみふ  
かくおもふべし。われ故郷に有しとき。わらハベの哥うたふを  
き、

よしやよしなや人うらむまし。みだれ車でわがわるい人にま  
じハるのをしへ。此うたにすぎたるハなしとおもひき。つたな  
きこと、思ふべからず。孔子の御教へにもかなふ。よき人はつ  
たなき言葉にても道にさへ叶ひぬれば捨ずとなん。むかしさる  
ことあり。滄浪の水すまば。冠の緒を洗ふべし。にござらば足を  
あらふべしと。おさなき童べのうたふを孔子聞給ひて。人ぐ  
をいましめ給ふ。水すめる故にたふとき冠の緒を洗ハれ。にご  
るゆへにいやしき足をあらハる。人の心もすめは人にうやまハ  
れて。よくもちゐらる。かふりの緒をあらハるゝがごとし。に  
ござらばあしくいはれて。賤しまれん事あしをあらハるゝにひと  
し。よつやこのをしへをきゝてもこゝろにござらんやあさまし  
○むかし人にまじハるに。したしミのあつからん事いかゞしぬ  
らんやと問に。とかくのことをいはずして。筆と紙とをこひ出  
して。堪忍の忍の字を百餘り書て見せ侍る。宜なるかな。われ  
にひとしき人の心はなければ。わが心にあふことのミあらんや。  
よつも又忍の字をむねに書付ることをわするべからず  
○恩ある人に報ひんこと人のつねなり。あたる人にあたにて

むくふ事は。ミちしらぬ人のこと葉なりとハ。呂蒙公の御をし  
へなり。よつもまたいましめよや

○わか身のあしきをせめて。人のあしきをせむる事なかれとハ。  
孔子の御をしへなり。よくわが身をかへり見よ。せむべき事數  
くなり。これをうちすてゝ人をせむる事はハだあやまれり  
となん。愚かにつたなき人も人のうへをそしり。人をせむるこ  
とハあきらかなる也。さしもかしこくあきらかなる人も身のう  
へのあしきを知る事はくらし。たゞ人のうへをせむる心にてを  
のれをせめ。わか身をゆるすることゝろにて人をゆるさば。大やう  
よろしからんとハ。范忠宣公の弟子をいましめ給ふこと葉なり。  
人のうへにあしき事あらばよくおぼひかくし。よき事あらばあ  
らハしあけよとハ朱子の御をしへなり

○人にまじハるにも下人をつかふにも。心にあはぬ事あればと  
くと理非をも聞わけすして。まつ腹立ぬること古人ふかくいま  
しめ給ふ。先はらをたてゝ本心をうしなふゆへに。理非も耳に  
いらぬものなり。つとめてはらをたてずして。つまびらかに正  
し計て理非をわかつべし。しかるにはら立ることをさきとすれ  
ば。ミづからわれをそこなふなり。いかりのゝしりて人をそこ  
なふと思ふこといつたなし。たとひ心のまゝに人をそこなひ  
得たりとも。道ある人の心にあらず

○夏虫を。何かいひけん心から。人もいかりにもえぬべらなれ  
此本哥はわれもおもひにもえぬべらなれとよめる恋のうたなれ



ども。いかりをこらすいませの哥にとりなし侍る。此文に古  
 き哥を引ぬる事これにならふべし。人よりわれにいかるとも。  
 いさゝかうこかす。あやまちは人より出たりとも。わがあやま  
 ちなりとをのれに帰してあらそふべからず。よきことあらばを  
 のれが心より出たりとも人にゆづるべしとなん

○たけぐしからずこそあらまほしき事なれ。こゝにありても  
 にくまれますとなん。古き文にあるをや。あハれなるやうにて

破損

つよからぬは女の

破損

つよきゆへには

やくそこね。舌ハやハらかなるゆへに身おハるまでそこねたる  
 事なし。古人も齒と舌とをたとへて。人のたけぐしき心はい  
 ましめたまふ

○仲由といふ人は。わが身にあやまちあるをきく事をよろこび  
 ぬる故に。ほまれかきりなし。今やうの人あやまちあれば。人  
 のたゞすをよろこばす。病ある人のくすしを嫌ふがごとしとは。  
 周子の御こと葉なり。われをそしめるものはわか師也。我をほむ  
 るものハわかあたなりとは。誰かいひしよきをしへなり

○人をつかふに情ありてよくをしへたつるわかちをしるべし。  
 よき人さへいづくまでもことたりて。いふところなしとおもふ  
 は至りてまれなるものなり。ましてすゑくハ道にくらければ。  
 一しほたらぬ事のミなるべし。此ことハりをあきらめしらば。  
 いさゝかのことをばゆるすべし。陶淵明といふ人。子のもとへ  
 下人をあたふる文に。汝あさ夕に苦勞をつとむる事いと不便也



15ウ



15オ

とおもふゆへに。薪たきぎをとり。水を汲くむたすけに此下人をあたふる也。これも亦人の子なり。此ものゝ親おやも汝なんぢをわがおもふやうにあるへければ。なさけありて目をかけよとなり。誠まことに人をつかふものゝのりとすべき文ならし

○人ごとに天道てんたうくくと口くちにはいへど。いかなる事ぞともしれる人まれなり。月日をまつやうのことをのミ天道とおもひぬ。天より人のひとたる道すなハち天道也。人は生るゝとひとしく天より仁義礼智のたねをあたふる。扱「16ウ」こそ人たる道を行ふはかの性ほかの外ほかにあらハるゝなり。人たる道正みちただしければ。これすなハち天道なり。家に居ゐて親おやにつかふるうちハ親天道也。ミやづかへする人は主君天道なり。人にゆきては舅しゅうしゅうとめをつと 姑こ 夫天道なり。わが心に偽邪ぎじやなく。或あるひは舅姑夫。或あるひは主君唯其身しゆくんたぎのある処ところにしたがひて。よくつかふまつる。是を天道にかなふといふ。わが心「17オ」と行まゐと天道にそむき天をまつり。神にいのるともうけたまふことあらんや。きみ見ずや。にごり江に月のやどりぬることいつかハある

○心だに誠の道に叶ひなば。いのらずとても神や守らん  
此うたの心をおもへや。まことのみちにかなハずは。いのるとも神はうけじとなり。こと葉の外によくきこえ侍る。誠の道「17ウ」とハ正ただしくして